

『おくのほそ道』再見続稿

——平泉より立石寺まで——

横 山 邦 治

一

『おくのほそ道』の行脚に旅立つ時に、芭蕉は白河の関を越えようと念じ、松島の月が心にかかっていたのであるが、当然この二つの著名な歌枕の地は芭蕉にとって印象深いはずであったけれど、この地ではともに発句一つ『おくのほそ道』に著録されていない、そして今ここで『おくのほそ道』本文に著録された発句を見ていくと、

○夏草や兵どもが夢の跡
なつくさやへいどもがゆめのあと

の句ができた平泉から、

○閑さや岩にしみ入蟬の聲
しづかさやいわにしみいれせみのこゑ

の句を著録し得た立石寺、そして「このたびの風流爰に至れり。」として、最上川の急流を詠んだ

○五月雨をあつめて早し最上川

の句に至る大石田まで、この間の発句の在り様は『おくの

ほそ道』の頂点を形成していると評してよいようである。その間の街道筋を見ても、尿前の関から堺田までの難路、堺田から尾花沢に至るまでの山刃伐峠を含む険路とあって、芭蕉にとっては印象深いところであったはずである。

日光から白河の関まで、昭和六二年の夏の終りに学生諸嬢と旅をした、その旅行記は既報のとおりであるが、昭和六三年の夏も、私は学生諸嬢と一緒に平泉から立石寺までの旅に出かけた。『おくのほそ道』のメインイベントなどと軽口をたたきながらの旅立ちではあったが、果して立石寺の石段が登れるかと危惧しながらの旅でもあった。

二

昭和六三年八月二七日（土）、一応広島駅の新幹線口に集合、八時五五分発のひかり二二号で花のお江戸に向う、今回の参加学生諸君は九州や中四国各地の出身者だけでな

く、関西や関東の出身者も居るので、広島駅頭に揃って集合という具合にはならなかった。お父さんがJRの職員という堀土さんが大活躍で、今回の旅の企画はJRに全面的に頼ったようで、新幹線も指定席というぜいたくぶりである。京都などで数名の学生諸君が合流して十三時三二分に東京駅に到着、その足でE電利用の上野駅、ここでお江戸への先着組やら千葉県出身の学生やらと合流、今回の旅行団が一応結成される予定であったのだが、上野駅の「新幹線改札口」集合というのが問題で、旅行団結成が難行という状況が現出した。何も大したことではなく、要するに上野駅の新幹線改札口というのが一ヶ所ではないらしく、十四時三十分集合ということで待ち時間が沢山あったにもかかわらず、千葉の方から出てくる綱脇君という学生の姿が見当らず、ヤキモキする破目となったのである。改札口の錯覚で駆け込みセーフとなったのだけれど、八月末の土曜日で、夏休み最後の行楽日らしく駅頭もごった返している感じで、団体行動不馴れな二十名あまりの女子軍団、果してこれからの数日間、上手に団体行動がとれるかという不安の念が横切った次第であった。

ともかく入場時間ぎりぎり集合、上野駅を十五時発のやまびこ四九号に乗り込むことができた。緑の多い東北の山と平野を切りさいて進む東北新幹線は、車窓の風景を楽しむ余裕を与えない、一関駅に十七時三六分には到着であ

る。一関の駅は、特別に印象に残るような駅ではない、在来線の東北本線と東北新幹線の駅とが併存しているので、大きな駅ではあるが、地方の凡たる駅で、街の有様をうかがう手だてはない。芭蕉が平泉探訪の足がかりにした町、曾良の随行日記に「十二日（旧暦の五月、陽暦六月二八日）一ノ関黄昏ニ着。合羽モトヲル也。宿ス。」と記された市街であるから一見したいとの思いはあるが、列車接続の都合で時間的余裕がないのが残念。一関は陸羽街道の宿場で、芭蕉来訪当時は伊達の支藩で田村氏三万石の城下町であった。伊達騒動の黒幕で有名な伊達兵部宗勝が、万治三年に仙台藩四代目藩主となった伊達綱村の後見となって立藩したのが一関で、騒動に失敗して失脚、兵部が土佐国に預けられてからはしばらく一関城代の支配となっていたが、天和二年に田村右京大夫建頭が名取郡岩沼から所替えとなつて当地入りし、城下町作りをしている。場所が石巻を発つて北上川沿いに一関街道を北上し、登米町から中田町を経て岩手県に入り現在の花泉町を通って陸羽街道に合流し一関に到着した「黄昏」時は、城下町作りの活況に満ちた夕景ではなかったか、「合羽モトヲル也」という強雨であったから、街頭に人っ子一人見当らなかったかなど想う。標高一六二七米の栗駒山を水源とする磐井川が東流して、やがて北上川に流れ込む直前の流域に立地する一関は、現在人口六万人あまり、近代的企業も誘致に成功して、地方中

核都市として整備されつつあるようであるが、駅頭から望見する市街は何の変哲ない地方都市の様子である。城下町としての古い面影があるのかないのか、その面影を探訪すれば芭蕉を偲ぶよすがともなるうかと思うけれども、今はかなわない望み、十七時五十分発の列車で東北本線を北上し平泉に向う。山ノ目という駅を経て平泉の駅で、十七時五九分着、一関からわずか九分で到着である。

曾良の日記の記述によれば、

○一 十三日、天氣明。巳ノ尅ヨリ平泉へ趣。一リ山ノ目

一リ半平泉へ以上伊澤八幡宮リ余リ奥也貳里半ト云々貳リニ近シ。

とあって、芭蕉主従は一関から二里あまりの陸羽街道を北上し、平泉の故地に辿り着いている。二里あまりを徒歩で行くのと、列車で九分あまりで着くのと、時代の隔たりは大きい、芭蕉の感慨と私どものそれとは当然のこと大きな違いがあるが、東北の午後六時頃というのは薄暗く、宿に急ぐべきところを、荷物を宿の出迎えの車に乗せて平泉の町並みを歩くこととする、東北の古都平泉の街を散策したかったからである。

駅前の道を右手にしばらく行くと踏切、それを越えてほんの数米歩く（この道の中尊寺通りと言う。）と、右手の方を指して伽羅御所跡に向う標識がある、ともかくと右の小道に入っていく。ほんのしばらく進むと、民家の前に伽羅御所跡という説明板が見える。木立ちと畑と民家がちまちま

と点在するこのあたりが、藤原氏の三代目秀衡が住んだという伽羅御所の営まれたところというのであろうか。牛若丸が金売り吉次に連れられて下向、北国の王者秀衡と対面したというのもこのあたりなのであろうか。牛若丸は、平家全盛の京の都の景観と比べみて、この地の有様をどのように感じて見たであろうか。辺境の地の貧寒さを体感したのか、規模こそ都に及ばないまでも、華麗な平泉文化にその身を託す心強さを感じたのであろうか、今更のごとく年若い牛若丸の心境を思いやることである。

説明板のところから左へ折れて小道を進んでいくと、右手の方に柳御所跡への標識が見える、その指示に従って進むと、発掘調査中か何かと思われる一面に出る、初代清衡が築いた居館跡である。『平泉館、柳の御所跡』の説明板があり、北上川の流れの変動で大半が河底となって一部分がここに残っていると説明してある。掘り返して荒れた感じのその場所を少し進むと、今の北上川の河岸に出る、高館橋という橋が架かっているところである。葦やら雑草やらが繁茂し、街外れなので手入れが放置されているのであるが、荒廃した感じの河端に降りて見る。急流とか激流とかいうのではない、長雨の影響か白濁した川水が豊かにゆったり流れている。盛り上がるように豊かな水量で、時に渦を巻きながらゆったり流れていく、下流だけに盛岡市内で眺めた北上川より大きな川幅である。水の流れに変動はあ

るのであろうが、川水の姿は往古と変らないはず、牛若丸もこの川水で遊んだかなと思う、そして初めて遙か東北の地に旅してきていることを実感する。

時間を過ごして夕闇が迫る中を引き返し、中尊寺通りに出て少し行くと、無量光院跡入口という標識を左手に見出す。夜目もあまり効かなくなり、宿の夕食の時間も迫るといので、その入口に入るには至らないまま宿に向う。荒廃の気を感じただけである。この無量光院というのは、秀衡が宇治の平等院を模して浄土思想顕現のため建立したものであると言われ、昭和二七年十月に発掘調査も行なわれてその規模も判明しているようである。毛越寺よりも一まわり大きな遺構で、約六・五ヘクタールあったと言う。現在では全て建築物が焼亡し、遺構は東北本線や国道などで分断されており、昔日の栄華を偲ぶようすがもないようである。〔平泉今昔〕読売新聞社盛岡支局編参照）

更に中尊寺通りを進むと小高い岡の前に出る、高館である。その中腹にある義経荘（平泉町柳之御所一〇―五四〇―九一―四六―四三五五）という民宿が今夜の宿である。高館の義経堂まで今一步のところであり、まことに都合のよい宿であるが、長い列車の旅に疲れて寝ること専一、外は雨もよいであった。

三

雨が降ったり止んだりの空模様、早朝薄明の頃義経堂に登る。かつて上野洋三氏に連れられて登った時の感銘を再びとの思いあり、夜明けの義経堂からの北上川と東稲山の眺望を楽しむ。平泉の観光案内類では、中尊寺参道の中腹にある東物見台からの眺望を絶佳と評するが、この義経堂のある高館の台地からの眺望には及ばない。くねくねと北の地の果まで続く北上川の流れ、その流れに沿って北上する国道や東北本線の直線的カーブ、北上川の両岸に広がる豊かな田園風景、そして柔らかな曲線を見せて鎮まる東稲山の景観、これらが雄渾な一幅の山水画のごとく眼下に広がっているのである。薄明の夜明けのもとでは水墨画のような色合いであったのが、曇天ではあっても明るさを増すごとに田園と山の線と川の輝きとが豊かな色彩を浮きあがらせてくれる、夜前の雨に洗われて色彩はあざやかである。日の出の陽光に木々の葉末が輝く風景を期待したが、曇天ではそれも望めない。

芭蕉がこの高館に登り、笠打敷^{うしき}て時のうつるまで涙を落し侍りぬ。と記録した時、旧暦の五月十三日は、「天気明」という（随行日記の記載）。「天気明」という表現は、随行日記の中ではここだけ、「天気能」とか「天気声」とか「晴」

「快晴」という表現は多いのであるが、「明」という表現は珍らしい。その意味するところは「吉」「能」などと比して今少し明確に指摘し得ないが、「明」とある以上は天候がよかったはず、前日、登米を発つ時は「曇」で、湧津では「雨強降ル。」となって「合羽モトフル也。」という有様、芭蕉の登った高館は夜前の雨に洗われた木々がさわやかで、それが陽光にさんさんと輝いていたはず、「巳ノ尅ヨリ平泉へ越。」たのであるから、二里あまりの道を歩いて十一時前頃までには平泉で最初の探訪地高館に着いていたはずである。現在の義経堂は、天和三年に伊達綱村が旧祠跡に建立したものの、芭蕉訪問の頃には真新しい建物として現存していたのである。その堂祠を見て往古を偲びながら、真夏に近い陽光のもとで、芭蕉は平泉の眺望をほしいままにしたのである。

随行日記に「申ノ上尅歸ル。」とあるので、芭蕉が平泉を逍遙し得たのは三時間強くらいと思われるが、その時間に随行日記に記録された所を全部見学したとすれば、超スピードの馳足見学で、現在のように自動車を利用して見学してもなかなか至難の業である。当然のこと義経堂の前で深い感慨にふける余裕はなかったはずであるけれども、一瞬の間に芭蕉の眼底に高館の風物が焼き付けられ、まだ義経ジンギスカン説は出ていない時代でもあって、悲劇的な義経主従の最期の様が脳裏をかすめ、後來『おくのほそ道』

執筆時にそれが一点に凝集してあの感銘深い一文となり、夏草やの名句を生んだのもあろう。そこには当然のこと芭蕉の実際の行動と、『おくのほそ道』に表現された文章から想定し得る行動との間には介離が生じて止むを得ないと言えよう。凡俗の私などは、眼前の義経堂を眺めながら、芭蕉の営為の在り様を追懐してみる外に芸はないのである。

四

夜前からの雨は半分小止みになって、時には雲の切れ目も見える空模様になったけれど、前の晩の洗濯物は一向にかわく様子もない、朝食をすませて九時頃から平泉探訪に出かける。まずは高館に登る、早朝は無人だったところに人が居て、入山料百円也を徴収されて義経堂に参拝である、若い人たちも高館からの眺望に息をのんでいる様子がうかがえる。小さな宝物館もあるが、特に見るほどのものはない。

高館の高台から降りて旧国道を少し北進すると、東北本線の踏切があり、その手前に卯の花清水の標柱あり、曾良の卯の花の句碑がかたわらに建っている、水はつめたくおいしい。踏切を渡って右の方、バス停やら土産店やら飲食店やらの並ぶ道を進むと、拝観券発売の東光坊。左手に木

立の下弁慶の墓と称する五輪塔の残欠とその標石とを見る
ことができる。関山中尊寺の表参道入口を示す大きな標柱
あり、少し勾配のきつい参道を登り始めると、老杉が左右
に立ち並んで月見坂との説明が見られる。更に進めば東物
見台、西行歌碑などの石碑群と雄大な展望が楽しめる、弁
慶堂を通り過ぎて少し右の脇道に外れて積善院、そこには
常設の奥の細道展がある。これは特別に珍しいものがある
というのではなく、多くの俳人たちの短冊と奥の細道各
地の写真の展示、一応見学すべきものと上り込んで一休み
である。参道を登りつめると中尊寺本坊、ここまで定石通
りの見学コース、本坊にお参りして例のごとおみくじを
頂戴、この本坊は明治四二年の改築、寺務を司どっている
庫裏は昭和十二年の改築と言う、天台宗東北大本山と称す
るにふさわしい威容を誇る。ところでどんな案内書を見て
も、芭蕉訪問時の中尊寺がどんな有様だったかを明記した
ものは見当たらないようである。『おくのほそ道』に記され
たものの検証に旅立った私どもにとっては、目前の本坊の
有様を見ても隔靴搔痒の感がある。

芭蕉訪問時の本坊はどんな有様であったのであろうか、
その周辺の有様はどんな様子であったのであろうか。藤原
三代の滅亡後、この平泉の支配者は葛西氏、木村氏、伊達
氏などへと変っていく、それに従って平泉は政治的にも軍事
的にも奥州の中心としての地位を失っていく、江戸期の平

泉は伊達氏の保護を受けてはいるけれども、田園地帯と化
した中に取り残された遺構の集落、現代のように観光化も
されていないのであるから、この本坊とて今のような威容
を誇っていたかどうか、あの伊達騒動の黒幕伊達兵部の一
関の屋敷から移築したという山門、どことなく武家屋敷風
で武骨な山門に相応しい本坊を想定すればよからうか。そ
して本坊から金色堂あたりの有様も、今少し蕭殺の気がみ
なぎっていたかも知れないなど思う。随行日記には、高館
・衣川・衣ノ関・中尊寺・別当案内光堂・泉城・さくら川・さくら
山・秀平やしき等を見ル。金色寺とあるから、この本坊に訪ず
れたのである。そして別当に案内してもらって金色堂を拝
観、"経堂ハ別當留主ニテ不開。"とて経堂は内部拝観でき
ずに中尊寺境内を去ったようである。

私どもも芭蕉の輦みにならって光堂見学である、現在の
金色堂は昭和三七年から四三年にかけて解体修理の後、昭
和四五年に鉄筋コンクリート造りの新覆堂が完成、金色堂
そのものはガラスケースの中にすっぽり収納されている。
近代的保存装置が完成して、空気も自動的に調節できるよ
うになっており、半永久的に保護・保存されるようになって
いる。見学者はガラス越しに金色堂と対面、拡声機によ
る解説を聞きながら、目前に解体修理されて豪華燦然たる
創建当時の姿に再現されているのを見ることが出来る。金
色堂を隅から隅まで見ることが出来るけれども、無機質の

空間という感じもあって、いくらか味気ない思いもする。

三十年近く前だったか、秋田県の本荘市で日本近世文学会があった帰路に立ち寄った時、旧覆堂の中に廃残の姿を見せていた金色堂を想起する時、文化財保護の在り様に隔世の感あるを禁じ得ないけれども、一面では五月雨の句を残した芭蕉の感懷を、現状のごとく立派に保護されていては十分に味わえないかも知れないと思うことである。

傍らの小屋で文化映画を見る、藤原三代のミイラを納めた金棺を開いて調査した昭和二五年の記録映画である。白黒のハレーションの多い画面ではあるが、藤原三代の当主に直接に対面するかなのような興奮がある。

金色堂の西北に隣接する経蔵、これは創建当時の建物で二階瓦葺であったのが建武二年の火災で二階部分を消失、後に修理して現在に至ったもの、その経蔵から旧覆堂、鐘楼、能楽堂などと芭蕉句碑を散策がてら見物、そして中尊寺十七ヶ院の国宝級文化財を収蔵するため昭和三十年に完成した収蔵庫としての讃衡蔵を見学する。数多い仏像仏具や藤原三代の金棺に納められていた遺品類など見るべきは多いが、ミイラより想定復原した北方の王者秀衡の像が印象深い。威厳と慈愛に満ちた温顔がそこにある、親なき牛若丸を愛育し、落魄の義経を保護した彼は、何を思い何を語ったのか。外は大雨となる、止むなく待合室でアイスクリームをなめながら待機である。

雨はなかなか止まない、小止みになったところで見残したものが大分あるがと思いながら下山、月見坂の方へ引き返すのも芸のない話と、近道のつもりで讃衡蔵の入口のところから脇道に外れて急坂を降りたら、帰路を見失なう。山より降りたところにあった観光バスの駐車場で運転手に帰路を聞いて、山の谷間の舗装道路を参道入口の町営駐車場に向って降っていく、地図で見ると中尊寺のある山と塔山や金鶏山の連山の谷間を通っている道である。一向に雨が止みそうでないので駐車場前の食堂で雨宿り、昼食とする。

今日中に鳴子温泉まで行く予定になっているので、少しいらいらしながら空模様を見ていると、明るい陽射しが雲間から洩れ始める、毛越寺に向って歩き始める。卯の花清水の踏切を渡らずに真直に進んで左手の坂を登る、毛越寺方面を示す標識に従って行動することとする。歩き始めたら暑い太陽の光が直射して、汗がしたたる有様、空模様は気まぐれである。民家の間を抜け、中学校やら民俗資料館やらを右手に見て、田園の中をしばらくウネウネと進んでいくと、観自在王院跡の標識のある広い屋敷跡に出る、発掘作業が完了しているようである。遺跡内に入ると、大阿弥陀堂跡と小阿弥陀堂跡の礎石が示され、その前方に舞鶴が池と俗称される広大な庭園の遺跡の石組みが見渡される、典型的浄土庭園という。藤原氏二代基衡公の妻、安倍

宗任の女の建立になるものと言う。時間切迫という学生の呼び声にせきたてられて、観自在王院跡を左手に見ながら毛越寺の現在の山門（大正十一年、旧一関田村藩の中御門を移築したもの）前に出る。今様の観光寺院前（ありふれた建物）が並ぶ広場である。

藤原基衡の建立した毛越寺は、平安朝風の庭園の遺構が完全な形で残っていることで著名、数年前訪問した時は龍頭鷁首の船の模型が池中に浮べられていたこともあった、その時には発掘していなかったかと思うが、遣水の遺構も完全に再現されていて、曲水の宴などという平安絵巻も髣髴させる景觀が、大泉池を中心とした周遊式庭園として再現されている。南大門の礎石のあるところから歩き始め、池をめぐって対岸（南大門から南橋が中島に向って架り、中島から北橋が金堂前まで架っていて、創建当時は南大門から橋を渡って金堂に至ったようである。）に至れば、嘉祥寺・金堂（円隆寺）・講堂・常行堂・法華堂などの礎石が広く見渡される。華麗な大伽藍がそこにあったことは『吾妻鏡』の記述などで充分想定できるのであるが、今はその痕跡を止めるのみである。

随行日記によれば、芭蕉主従は毛越寺を訪問していない。現在の毛越寺本坊は、明治も終り頃からの造営で、それも南大門跡南側の広場に建てられたことによって、毛越寺の遺構が完全に保存されたようである。藤原三代滅亡後、平

泉のこの地が中世から近世を通じて政治経済の中心地とならなかったことが、現在の姿を残し得たことになるのである。それはそれなりに幸運と言えるのであるが、芭蕉訪問時には、伊達藩の保護を受けていたという庭園遺跡を除いて正に山野に帰していたわけで、それは芭蕉の興を引くところではなかったのでもあったろう。時間がなかったのかも知れないが。私どもも時間にせまられてはいたが、南大門跡の側に掲示してある毛越寺七堂伽藍復元図を見ながら、脳裏に往時の壮麗な様子を思い描き、近代の発掘調査の成果を享受することである。

山門前の道を真直に進めば平泉駅、右手に平泉博物館を見ながら時間がないままに駅に直行、十五時二七分発の列車で小牛田（こごた）に向う、東北の農村といえど出稼ぎとか過疎とか暗いイメージが付きまとうが、平泉から小牛田の間の典型的東北の田園風景は、おだやかで稔り豊かなものではある、経済の高度成長のかげに取り残された産業の最たる農業が、豊かな生活を保証するものでないことは十分に解っているのではあるけれど、稲穂のそよぐ風景はやはり心を豊かにしてくれる。瑞穂の国に生まれた者の感覚なのであろう。小牛田は陸羽東線への分岐点、東北本線では大きな駅の一つであるらしいが、田園の中の町で、都会という感じではない。

小牛田駅を十七時十六分発の列車は各駅停車の鳴子行、

単線としてのんびりのジーゼル車である。東北新幹線と交差する古川市は相当の都会、新しい工場群もあちこちに見られるのも新幹線の影響か、その他は小牛田から岩山あたりまで田園の中を線路が横切っていると言ったらいいか、岩山あたりから左右に小高い山が迫って山の中に入っていく感じとなる。

芭蕉主従は一関の宿を発って、次の夜は「岩手山ニ宿ス」。一関からは陸羽街道を南下して、一ノ迫・二ノ迫・三ノ迫を経て岩手山に至っている。随行日記には地名として岩崎・真坂・金成・一ツ栗が見られる、陸羽街道をどこで右手の道に入って行って岩出山に抜けたのかを今の五万分の一の地図上で辿れば、金成から右に外れて岩崎・真坂・一ツ栗と辿って、少し逆もどりの感じで岩出山に着いたことになる。日記には岩崎が伊達家の重臣藻庭大隅と関係あるとの記述あり、岩出山は伊達将監（岩波文庫注には綱村の弟村和のことかとある。角川文庫注は伊達敏親かとある。）に關係あるとする、一種の城下町であつたのであろう。金成から岩崎へ、真坂から一ノ栗までは平坦な道と言うのではなかったのではないかと地図上では想定するが、私どもは遠回りの列車で全く見るを得ない、残念なことである。

日記には、岩出山のところを次のように記している、「岩手山^{伊達将監}やしきモ町モ平地。上ノ山は正宗の初ノ居城也。杉茂り、東ノ方、大川也。玉造川ト云。岩山也。入口半道

程前々右へ切レ、一ツ栗ト云村ニ至ル。小黒崎可^レ見トノ義也。遠^{ニリ}キ所也。故、川ニ添廻テ及暮。岩手山ニ宿ス。」というのである。岩手沢城址あり、要害の地で古来諸將の拠つたところ、伊達政宗が最初に城を構えたところでもあつて、「封内記云、岩手沢城、在山上、郷俗曰之岩出山、非歌林所称之地、天正十八年八月、東照神君、討葛西大崎之遺党、而帰路経此城、修補其要害、本丸神君制之、二丸外郭榊原式部大輔康政制之、營築已成、同年九月、令貞山君居之、後経十二年、慶長七年、移于宮城郡仙台城。」（『大日本地名辞書』）とある。車窓から駅頭を眺めていると、政宗の居城跡のあることが大きく揭示されているのが見える、降りて城跡のある山を確認するに至らない。列車が動き始めて、城跡のある山はどこかとキョロキョロするが、よく判らない。車窓から見て左手のいくらか岩山らしい小山がそれかと眺めるが、瞬時にして通過である。

岩出山から鳴子までは五駅、左手に江合川（荒雄川）を望みながら、深緑に覆われた谷間をくねくねと進む。奥深い山々である。東鳴子駅の手前で鉄橋を渡り、今度は右手に大河を望みながらしばらくで鳴子駅に着く、十八時三十分。雨もよいの空で薄明という感じである。大正館という温泉旅館、新築の日本風旅館だけれど、温泉街のほぼ真中にあり、古い旅館らしい。平泉見学は相当強行軍で疲労が目立っているが、入浴して豪華な夕食をすますと若い娘子

軍は元氣回復、夕食後土産物店を求めて出かける者も多い。降ったり止んだりの不安定な雨が、夜中ごろ激しい雨音を立てていた。

五

岩出山に一泊した芭蕉主従は、十五日（陽曆七月一日）

には堺田に泊っている、随行日記に出てくる地名を今の地図で検すると、宮・小黒崎・名生定・鍛冶谷沢・尿前・中山と経て堺田である。芭蕉たちは江合川の北岸を上流に向って歩き、歌枕の小黒崎と美豆小島を眺めて鳴子温泉を川向うに望んで古戸前に着き、岩淵山（四六七米）の麓を大きく曲流する江合川に、鳴子峡の清流が流入するあたりで渡河、^{（意）}尿前^{（シトマヘ、取付左ノ方、川向ニ鳴子ノ湯有。沢子ノ御湯成ト云。仙台ノ説也。）}関所有、断六ヶ敷也。出手形ノ用意可有之也。”とあって尿前の関所を越えている。そして中山平の峠を越えて堺田までを歩いている、難所多く旅する人も多くないところとて、馬ではなかったであろう。元禄九年に旅した桃隣の『陸奥衛』に「川向ニ尿前ト云村アリ。則しとまへの関とて、きびしく守ル。越へ行ば、笹森・うすぎ、此間に、かめわり坂有。小くにより新庄への脇道也。尿前より関屋迄十二里、山谷嶮難の徑にて、馬足不_レ立、人家纔にアリ。」と記しており、「二度可_レ通所にあらず」と評しているのである、難所であった

ことがはっきり判ると言えよう。私どもが歩くところは、芭蕉たちが歩いたのに比すると三分の一ぐらいの道程であるが、鳴子から尿前を経て堺田までは歩くことに予定されている、案内書など見ると三里弱である。幸いにも雨は止んで、夏の陽光が雲間から洩れる状態になっており、荷物は大正館の車で次の宿まで送っていただいて勇躍出発する。鳴子の駅前で駅弁を調達、山の中を歩くこととて途中で食堂などないであろうという想定のもとである、食べることには抜け目はない。田舎の駅とて二十人分の駅弁がすぐ調達できず、待ち時間は駅前の喫茶店でコーヒータム。駅前から商店街を西に向って歩き始める、旧道という感じで狭い道である。しばらく進むと踏切がある、踏切を越えて家並みの間から右手を望むと、江合川の濁流が見える、土地の人は荒雄川と呼んでいるようであるが、長雨のせいで水量多く荒々しい流れである。大きな川で、はるか対岸に町並あつて川より相当の高さのところ、道が見える、芭蕉主従が辿った道である。川幅は広く、谷間の道ではあつても、はるかに向い岸の深い緑を眺めながら、芭蕉は心楽しみながら歩いていたのではないかと思う。そんな風景である。

今しばらく進むと、鳴子名産のこけし造りの作業場と売店とが並んでいる一帯に出る。近代化しているが、手工業的面影を残しているこけし作りの工程を見る、こけし首と

胴体がくりくりと作り出され、胴体に首が付けられる手際は煙がぱつと立ちのぼって手品を見る感じ、色付けもサツサツと手早く、面白い見ものである。このあたりで新しく広い国道に出る、川沿いに新しく作られた道である。

鳴子峡から流れ出る江合川の支流に架る大谷橋を渡ると、国道は大きく右に曲る、その手前の土産物店の左手に小さな道があつて鳴子峡の入口である。溪谷美に満ちた名所で、この溪流を抜けると二時間あまり再び堺田に通ずる国道に合流すると言う、私どもは尿前の関に向かわなくてはならないので、鳴子峡をあきらめて、大きく曲っている国道を少し進むと、尿前の関入口の標識があつて、右手に下り坂がある。大きな木が茂っていて薄暗い感じの道を下っていくと、左側の道傍の斜面に鳥居と小祠と句碑とが見える。蚤虱の句碑で「明和五戊子六月十二日建」と年号が刻してあるもの、広い国道から離れて百米ばかりで木の下闇という感じのところで、刻字もよく見えない感じ。少し進むと右の道傍に「尿前番所跡」の大きな標識が見える、そこから川の方に向つて石畳の道をだらだらと降りたところ、尿前の番所跡である。掲示板に詳細な説明が書いてある、伊達藩の尿前境目番所で相当大きな構えの関所であつたようである、随行日記に「断六ヶ敷也」とあるのだから、相当嚴重な関所であつたのであろう。今は数軒の民家らしきが点在するだけで、昔日の俤をうかがうに至らない。

鳴子峡の合流点より少し上流の江合川を渡って、芭蕉たちは尿前の関に着いたのであるが、千米に近い山々が前方に立ちふさがっている様子を見て、出羽路の困難を今更のごとくに覚悟したのではなかったか。現在では、尿前から中山宿を経て新庄領堺田までの出羽街道中山越えが「歴史の道」として復元されており、尿前の関跡から少し行くと、階段状にコンクリート製の丸太で作られている急坂がある。途中に足だまりもあつたりの相当に長い坂で、後を振り返ると江合川から向うの山々が一望のもので、日本的規模で申しての雄大な景色である。高館からの北上川の眺望に比して、いくらか荒々しさがあると言えようか。

急坂を上り切ると国道、それを横切ると更に向うに急坂が見える、鈴鹿でも箱根でもそうであるが、旧道が新らしい国道で寸断されているのである。国道を左手に逆行すると日本こけし館である、新らしく造成された広い敷地が日本庭園風にしつらえており、その中にレストランと日本こけし館・皇太明神社（こけし神社）・伝統工芸木地研修所などが点在する。こけしは女性に人気の土産品、館内を見学をする、当地のこけし愛好者深沢藍・溝口三郎両氏のコレクションを中心にこけし祭に奉納された全国の工人たちの作品が展示されている。パンフに「こけしの歴史」が記されている、「こけしの起源は今から約二百年前、文化・文政の頃と言われています。奥山で木地業を営んでいる人

々が、木をけずり目鼻をつけ人形として我が子に与えたのがはじまりで、その後、この人形は江戸末期から明治の始めにかけて雪深い東北地方の温泉場を中心に育まれ、みやげ品として売られてきました。(後略)と言うので、現在東北の代表的人形として珍重されるこけしも、芭蕉時代には存在しなかったようである。芭蕉のおくのはそ道の旅の宿々で、こけしが存在していたというのは十分にふさわしい点景のように思われたが、そういう想定は無理のようである。

国道で中断された中山越えの道は、再び段々の道が作られており、日本こけし館のある鳴子公園の新造地で再び中断されている。この鳴子公園から中山越えの道と思われる方向へ歩くとだっ広い草地の中の一本道があり、その右脇に斉藤茂吉の歌碑がある、そこを越えてしばらく歩くと再び国道に出てしまい、深い溪谷の上に架った橋を渡りながら進むこととなる。そのあたりをウロウロしていると、ドライブインのある前方、国道の右手に中山越えの道に入る標識を見出す、小躍りしてその道を下る。相当に急な下り坂で、九十九折の小道であるが、整備されているので歩くのに困難はない。深い沢に下りる、小深沢という沢渡りで解説板に詳細な説明がある。カメラに写したけれど、木の下闇の薄暗がりの中とて撮影不鮮明、ここに再録し得ない。雨後にかかわらず、清冽な水が流れている沢である、

この谷間で休息、沢の水を呑みながらお弁当である。

再び九十九折の急坂を上ると、広い林の中に一筋の道がある、時には倒木が道をふさいでいるという道である。それを越えると再び急な下り坂となる、大深沢という。確かに小深沢に比べて規模の大きい沢であり、修復され方もコンクリート製の丸太などで相当堅固に構築されている、そうでないとい寸した雨などでも道が流されてしまうであろう。

谷底にまで降りると、立派な説明板があつて詳細である、一部を抄録すると、陸奥より出羽に通ずるこの街道中鳴子村には、玉造川歩渡・大谷川歩渡・尿前坂・苗からし坂・小深沢坂・小深沢歩渡・大深沢坂・大坂沢歩渡・きね坂・いさこ坂・陣ヶ森坂・軽井沢坂等の坂や歩渡が多く、この街道中最もけはしい道筋である。などある。難所であったに違いない様子が、整備された道を歩いてみて一層髭髯とする。再び木の下闇の急坂を上ると、山間の農園風の民家が点在する高原に出る。敗戦直後に各地で引揚げの人たちが食糧確保のために開いた開拓村の残存物の面影がある。そうした山中の農園風の倉庫などが点在する斜面のだらだら坂を降りると、再び国道四七号線に出る。元蛇の湯などという温泉宿が見られ、その温水を利用しているのであろうか、熱帯植物園の看板が左手に見えるあたりから国道を歩き始めると、曇り空から大粒の雨が降り始める。途中で公

営の湯治場に雨宿りしたりで難行苦行、途次国道をそれて山中平のJR駅にたどり着く。山中平から堺田までJR一駅区間の歩行をあきらめて列車時刻を見ると大変な待ち時間、タクシーを呼んで堺田まで飛ばすこととする。タクシーの待ち時間も相当あるという不便な山中である。タクシーに中山平の宿という集落に寄ってもらう、国道から少し離れた旧道があり、古い出羽路の宿場だったところという。三四軒の古い民家が道筋に並んでいるが、果してこの街道筋に宿場町が形成されたかどうかと思うことである。

井本農一氏の「おくのほそ道をたどる」の中に「陸前・陸中から、奥羽山脈を越えて、羽前・羽後の地方へ出るには、この道が主要道路の一つであったのだから、人跡まれな道ではないはずである。」と記されているが、程度の問題ではあるけれども、旅人が多く行き通う道でもなかったはずである。桃隣も「馬足不レ立」という、馬も駕籠もなかった道と思われるから、政治的にも商業的にも交流が多い街道ではなかったのではないか。物産も太平洋岸側と日本海岸側とは、それぞれ江戸と上方に輸出されていたはずで、両者の間での交易は少なかったはずである。当然のこと宿場を形成するほどの旅人の移動はなかったと思うことである。

とは言っても、宿という名の残る集落があり、その集落から小高い山地に向って細い峠道が連なっている、旧街道

である。宮城県から山形県へ越す出羽路、その宮城県側の最後の集落が宿であったようで、何らかの宿場の機能は果たしていたのであろう。しかし芭蕉たちはこの宿では泊らずに堺田に向っている。芭蕉たちが辿ったであろう峠道を、タクシーはしばらく登ってくれたが、途中で立往生である。前方を見ると山の中をなだらかな起伏のある道が続いているようである、陰路というのではなさそうであるけれども、雨中のこととて歩くのをあきらめて、私どもは一気に封人の家の遺存するという堺田に向う。山形県の県境を越えて、最初の集落が堺田である。

六

尿前の関を越して堺田に至る行程を、芭蕉は次のように記す、

○大山をのぼつて日既暮ければ、封人ほうじんの家を見かけて舍やどを求む。三日風雨ふううあれてよしなき山中さんちゅうに逗留とうりゅうす。

蚤虱馬のみじの尿する枕もと

「大山をのぼつて」と言う、この大山は中山越えを指すこと、随行日記発見以後は諸説一致するところであるが、この表現が果して中山越えの状況を的確に表現し得ているかどうかは問題である。「大山」を「登る」というのであるから、随行日記発見以前には「陸羽の界なる矢柄山」(黒

沢・詳解」とか「亀割峠」（萩原・尋ねて）と言う説もあったのである。中山越えは、山を越えるのではなく、起伏多くて深い沢の点在する高原を越えるからで、「大山」という表現がそぐわないとされたのであったろう。ただ尿前の関の前方に立ちふさがる山塊をのぞみ、胸突き八丁の急峻を登り切って、更に小深沢・大深沢の深い沢を登り降りする険路を経験すると、それが一つの大きな山を越えるのではなくとも、「大山」を「登る」という表現を用いざるを得なくしたのかも知れなかった。実際体験してみると、随分改修補繕された道ではあるけれど、恐らく芭蕉主従が江戸を発って初めて経験する険路であつたろうことを実感し得る道なのである。それが「大山」ではなくても、「大山」と表現した芭蕉の心を、ここでは追体験してみるべきなのであろう。

山形県に入って最初の集落が堺田で、芭蕉の記述からも察せられるように山間の避地というべきなのであろうが、近くにJRの駅もあって廃屋の並ぶ過疎地というほどの感じは受けない。新しい国道の側に「封人の家」は昔日の倅のまま、そこに遺存している。「奥の細道 封人の家」という大きな標柱があつて、芭蕉様とは切つても切れない存在としてあるのである。百円の観覧料で屋内外を自由に見学できる、山形県最上町の最上町教育委員会の封人の家管理事務所の管理下にあり、高令ながら親切な管理人さんが

応待して下さる。パンフレットの記述を再録してみる、「この建物は本県東北部に見られた広間型民家の代表的なもので、昭和四四年十二月十八日、重要文化財として国の指定を受けた町有の建造物です。昭和四六年六月から同四八年三月まで文化庁並びに関係機関の指導監督のもとに解体復原工事を行い、建築当初の姿に復原したものです。」とある。正面は南向きで二五・五四三米、奥行きは一〇・七八七米、建坪は二六九・一八〇平方米（八一坪）という豪宕とでも称すべき建物、更にパンフレットは「堺田村は寛永十五年（一六三八）以後、正保年間（一六四四―四七）頃までの間に独立村となりました。永くこの家に住んできた有路氏は代々この村の庄屋で、当主は十五代目と伝えられています。また、この建物の様式や技法には元禄をくだらない古さが見られ、約三百年の歴史を経ていると推定されます。その特質は、いわゆる役屋（村役場）としての性格をもち、さらに問屋や旅宿の機能もそなえた国境の庄屋家屋にふさわしい構えといえることです。」と述べる。

大戸口から土間に入る、右手に三間の馬屋がある。大戸口に近い馬屋は広く、農具が置いてある、そこで馬が飼われていたのかどうかは判らないが、裏口の方に位置する同型の二間で馬が飼われていたことは間違いないことである。「馬の尿する」雑音は、正しく芭蕉の耳に届いたのである。広い表から裏まで素通しの板の間である小座敷には、

囲炉裏がある、昔は農家の必需品であったはずなのであるが、今の人には珍奇さはあってもなつかしさは感じられないようである。管理人さんが、主人や主婦や客人の坐る場所が定まっていたと説明してくれる、芭蕉主従が坐ったであろう場所に坐ってみるが、囲炉裏に火の気はないし、裏口の傍にある水屋にも全く生活の臭いはないのだから、夏とは言え雨滴の冷気が身を刺す感じである。裏の納戸は板の間であるが、中座敷、入りの座敷、床の間の三間は畳敷きである、中座敷が畳が敷いてあったのかどうか、入りの座敷の前に玄関があり、お役人などを迎えるところらしい。私どもは庶民であるから一寸遠慮して中座敷で横になって休む、見物の人も少いこととて足を伸ばして大きく伸びをしてみる。朝から歩いていることとて足の痛いことである、いかに健脚を誇る近世人の芭蕉主従とて、小深沢と大深沢の難所を越して来ていることとて、相当疲れていたはず、到着早々に横になってネマル状況になっていたかも知れないと思うことである。

裏口から外に出て見ると、水を水屋に引く大きな木をくり抜いた樋の残骸があつて、山の水を炊事などに用いていたことが判る、井戸水を使用していたのではなさそうである。随行日記に「和泉庄や、新右衛門兄也。」とある、山形県奥の細道観光資源保存会発行の「奥の細道・出羽路」というパンフに「昔からある裏手のかけ樋の水が清冽でい

づみの庄やの名があつたと家人がいう。」ともある。古い写真ではかけ樋の尽きるところが小さな水溜りの池になっており、炊事洗濯の場となっていた有様がうかがえる。その生活の痕跡は、今はない。庭というほどのものは見当らない、裏口の向うに民家が数軒見られる、現在の有路家の当主の住居であるらしい。サッシのガラス戸をめぐらした最近の建物で、農家風の建て方はしていない、テレビのアンテナも洗濯機も見えて、そこには現在の生活の息吹がうかがえる。一方国道の向い側に古い風情を残す大きな建物が見られ、詮索すれば由緒もあるのであるが、詮索する手立てとてない。学生たちはカメラでパチパチ写真をとっている、小宮豊隆筆の芭蕉の句碑「蚤虱」は絶好の被写体である。

封人の家から国道四七号線を横切つて、田圃の中を進むと、谷間という感じのところにJR堺田駅がある。十六時八分の電車に乗って十四分には羽前赤倉駅である、笹森の口留番所跡などはパスである。随行日記には「十七日 快晴。堺田ヲ立。一リ半笹森関所有。新庄領。関守ハ百姓ニ貢ヲ有シ置也。」とあるところ、「奥の細道・出羽路」には「笹森のこの家はまだほゞ昔のまゝの造りで残っていて関所をかねた頃の俵があり、当主を佐藤久米さんという。この家の前を通つて左につゞく昔の道が今もあり草分け観音という堂がその傍方に荒れ放題になって立っている。」と

見える。この笹森は、堺田駅と羽前赤倉駅との中間地点にあたるのであるが、これ以上歩く元気をなくしている、この街道は、「この谷間を新庄の方へ堺田、笹森、向町、舟形と下って行けば大廻りになる。そこで尾花沢に行こうと志す芭蕉主従は、笹森をすぎ明神のあたりから左手の谷間に入ってその奥、一列の部落にかかり」（奥の細道・出羽路）山刃伐峠に抜けるところ、新庄への街道と山刃伐峠への道の分岐点確かめたいとも思うが、地図上で確認するに止めざるを得ない。

JRの羽前赤倉駅は、山中の無人駅然とした堺田駅に比すれば、売店などもあって近代的駅舎である、温泉を近くに控えているからであろう。駅頭からペンション山の湯（最上郡最上町大字富沢九二九―十八・Tel（〇二三三）四五―二六三六）に電話をして、マイクロバスで迎えに来ていただく。バスは国道を逆行して明神川（小国川の支流）の橋を渡って明神の集落を抜け、万騎ノ原を通って赤倉温泉に着く。赤倉温泉というのは「貞観五年（八六三）に慈覚大師が開湯した温泉と伝えられています。大師の掘った湯は万病にきくとの評判で湯治客が増え、その後この温泉は翁山参詣の宿場ともなり、大変にぎわったそうです。江戸期には、新庄藩の管理下に湯守が置かれて、温泉が利用されていました。（パンフ）というものの、ペンション山の湯は小国川の清流に面して家庭的雰囲気満ちた宿、若い御夫婦が経

営しておられる。歩き疲れた身体も、熱い湯に入り、若夫婦手作りの洋風ランチを軽く淡いワインと一緒にいただく、リフレッシュである。明日はいよいよ山刃伐峠を越えて尾花沢、大雨で増水している小国川の川音と時に激しい雨音を聞きながら、明日の晴天を祈って寝る。深い眠りで山刃伐峠の夢もなしである。

七

山刃伐峠を越える描写は、『おくのほそ道』の行脚描写の中で最難所と印象付けられるものである、赤倉温泉での仮寝の宿で、堺田から山刃伐峠越えの記述を反芻してみる。

「封人の家」に「三日風雨あれてよしなき山中に逗留」

（ここに三日とあるのは、随行日記によると、十五日の夜に到着して泊り、十六日は「大雨」で「堺田に滞留」し、十七日は「快晴」で出立とある日時を指す、実際は二泊で滞在は一日だけ、二泊三日の意と解するも可であるが、誇張表現という論あって然るべきところである。）した芭蕉は、

○蚤虱馬の尿する枕もと

の印象深い発句を詠んで出立したという。

「蚤虱」の句は、封人の家を象徴する句としてもてはやされ、庭前に大きな句碑まで建てられているのであるが、そこに見られる蚤と虱と馬の尿という語句は、農山村の貧

家の点景を示す俗な語とされ、それを詩語として昇華したものと評されており、近時の文庫本を見ても、「山中陋屋の実情をそのままよんだのであるが、蚤虱に攻められるのは貧乏旅の常である。枕もとに馬の小便する音を聞くに至って、旅の憂さつらさもきわまってくる。」（角川文庫、発句評釈）とあり、「蚤や虱になやまされる貧しい旅宿。同じ屋根の下に馬を飼っているので、馬の小便する音が枕もとに聞こえる、これも旅の風物の一つか。」（講談社文庫・現代語訳）とある、貧家の景とするはいづれも同じであり、基本的には諸解一致するところである。

堺田の集落では吃立して立派な豪家である有路家を見学直後の印象から申せば、貧家の景というには違和感が伴う。岩出山の宿を出立した芭蕉主従は、鳴子の温泉郷を川向うに望みながら通り過ぎ、尿前の関を越えて中山越えの難所にかかり、宿という宿場でも泊らずに堺田までの強行軍、「小雨」という悪条件の中での強行軍は、堺田に「封人の家」という立派な宿泊施設があると仄聞していたから出来たことなのであろう。堺田という目的地を前もって聞いていないとすれば、また別様の行動があり得たはずなのである。井本農一氏も「おくのほそ道をたどる」で同趣旨の発言をしておられる、『おくのほそ道』の本文の記述を挙げて、そのように「無計画に泊まったのではなく、今夜は堺田か笹森あたりへ泊まろうと予定されていた宿泊地だった

ように思われる。」とされている。このように芭蕉主従が計画的に有路家を宿としたとすると、従前の「蚤虱」の句の解釈は、芭蕉たちの期待に反して、蚤虱がうようよしており、馬の尿の音と臭気で居たたまれないほどの貧家であったということになり、そこに「そうした貧賤窮苦に興がる情さえ湧いてくる。」（角川文庫本・発句評釈）という感情があったとしても、堺田の封人たる有路家に対して極めて失礼な句を残したことになる。芭蕉は有路家の当主を「あるじ」という語で表現している、『おくのほそ道』で芭蕉が「あるじ」という語で呼んでいるのは、仏五左衛門・黒羽の館代浄坊寺何がし・山中温泉の久米之助であり、等栽の妻が主人を呼ぶに用いている、それらは全ていかほどの敬意をもって呼んでいるようである。当然有路家の「あるじ」という表現は、いかほどの敬意を含んだものであるに違いなかった。とすれば、「山中陋屋の実情」を直敘し、「貧賤窮苦」の様子を赤裸々に示す句をここに記すはずはなかったろう。それは「あるじ」に対して、失礼ともいうべき行為であったはずである、「よしなき山中」という表現が、そうした評解を生む素地になっていたにしてもである。「蚤蚊にせゝられて眠らず。」という飯塚の宿を、「あやしき貧家也。」と記して、そこに共通の表現を見出し得るにしてもである。

蚤も虱も、当代人にとって人間生活の同伴者であった、

不快な同伴者ではあったが、それが貧しさと常に同居していたわけではあるまい。当代人には限らない、つい最近まで、DDTが輸入される敗戦直後まで、蚤と虱と蚊とは、私どもの生活同伴者だったのである。蚤の取り方が上手な母が、いいお母さんだったのは、つい四十年ほど前のことに過ぎないのである。馬はむしろ富の象徴、家屋の構造上で屋内で飼われているのであるが、長野県の平谷という山中でも同じような造りの農家を実見したこともあり、決して当地方だけの特異なものというのではなかったであろう、馬産地では十分にあり得た風俗であったであろう。そこで三頭も馬を飼っていたとすれば、富裕な農家の証であったはずである。馬産地ではない伊賀上野の産たる芭蕉にとつては珍なる家の構造であつたかも知れないが、多くの馬を保有していることが富者の証であることぐらいは十分理解していたはずである。

「蚤」も「虱」も「馬の尿」も、これらが詩語、雅語でなかったことは説くまでもない、精査したわけではないけれど、和歌などには勿論のこと歌謡の中などにも見受けることのない語、さすが川柳には「ひねる手を潜って野見は刎付ける」などという秀句を見かけるけれども。ともあれこれらの語句は、俗語の中での俗語、卑語とでも称すべきものののである。芭蕉が「俳諧の益は俗語を正す也。」などと説いて、俗語を積極的に俳諧に採り上げて、それを詩語

として昇華させるよう努力していたことは、多くの識者によつて既に指摘されていること、この芭蕉の俳諧観から、「蚤虱」の句を観れば、殊更に陋屋の景とか貧窮の様とかいう標語を持ち出す必要はないのではなからうか。平泉の高館の句から句境の高まつている芭蕉は、この堺田の宿舎における身辺の雑事とて詩に昇華し得ると確信したのではなかったか。事実、山中の農家の生活の襷が生々と捉えられていると評し得る句となつている。人間の生活の臭いが迫つてくるとも評して可なのであり、そこに俗語を正すという姿勢も読み取り得るのである。こういう読み取り方を、芭蕉は拒否しないのではないであらうか。

ともあれ「蚤虱」の句をもつてあいさつした芭蕉主従は、その堺田の有路家の「あるじ」から「是より出羽の国に大山を隔て、道さだかならざれば、道しるべの人を頼て越べきよし」を注意され、「さらば」と「人を頼待れば」、「究竟の若者」が「反脇指をよこたへ、櫛の杖を携て」先導することとなり、いよいよ山刃伐峠にかかるのである。この山刃伐峠にあるじの言葉としてではあるが、「大山」という表現を用いる。この「大山」という表現は、『おくのほそ道』ではこの場面とこの前の中山越えのところで用いているだけである。中山越えが、「大山」という表現には必ずしもそぐわないものであることは、既に指摘したところ、沢渡りの難路であつたのを「大山」という難所としての一

般的称呼で表現していたのである。山刃伐峠は果してどうなのであろうか、『おくのほそ道』では「高山森々として一鳥聲きかず、木の下闇茂りあひて夜る行がごとし。雲端につちふる心地して、篠の中踏分く水をわたり岩に蹶て、肌につめたき汗を流して最上の庄に出づ。」と描写している。「高山森々」とか「雲端につちふる」（詳考では「古語をかり用ひて文飾した表現であるから、きびしく写実的なものとして読む必要はない。」と説かれており、実景描写と解する要はないかも知れないが。）などあって、「大山」という表現と対応するごとくでもある。五万分の一の地図を見るに、山刃伐峠の頂上は四五五米、東方に大森山八九七・二米とか翁峠一〇七五米とかいう山が見られるけれど、大山と称すべきところとも思えない。今は実見すべしである。

八

三十日は赤倉温泉のペンション山の湯の若いオーナーがマイクロバスで案内して下さるという、山刃伐峠越えもマイクロバス同伴という過保護体制ではある。

芭蕉主従の山刃伐峠越えは随行日記に詳細で、『おくのほそ道』の記述と齟齬するところはない、「十七日 快晴。堺田ヲ立。一リ半笹森関所有。新庄領。関守ハ百姓ニ貢ヲ有シ置也。サ、森、三リ市野々。小国ト云ヘカ、レバ廻リ

成故、一バネト云山路ヘカ、リ、此所ニ出。堺田々案内者ニ荷持セ越也。市野々五六丁行テ関有。最上御代官所也。百姓番也。関ナニトヤラ云村也。正殿・尾花沢ノ間、村有。是、野辺沢ヘ分ル也。正ゴンノ前ニ大夕立ニ逢。昼過、清風ヘ着、一宿ス。」ここに見られる地名を出来るだけ視認したいものであるが、笹森は昨日JRで通過しているので本日は無視である。笹森から明神川沿いに明神という集落まで来た芭蕉たちは、新庄へ向う道は尾花沢へは大廻りというので、本街道を外れて左折し「一バネト云山路ヘカ、リ」、山刃伐峠に向ったわけである。赤倉温泉を出発したマイクロバスは、芭蕉たちも辿ったと思われる道筋を一列に向う、「山路」であつたのだろうか今は舗装された田舎道である。広い国道などに比すると狭いものであるが、車は十分にすれ違ふことができる道、田圃と小山の中の一本道で人家もあまり身受けない。一列の小集落を過ぎると市野々に至るまで全く人家を見受けなかった、そこは現代でも山の中である。一列から左手に大野山（八九七・二米）をのぞみながら山あいの少し上り坂の道を進むと、マイクロバスは左手の少し細い道に外れて一寸した広場に駐車する、広い道をそのまま行けば山刃伐隧道を抜けて赤井川沿いに市野々に直進できる良道らしい。

広場の奥まったところに「奥の細道山頂登り口」の標識あり、中山越えの所々にも見られた立派な説明板もあって、

細い石段めいた登り口が見える、神社の参道めいた雰囲気、古木というほどのものではないが鬱蒼と雑木が茂っており、「木の下闇」という感じが私にも迫る。ペンションのオーナーが、歩いて登るか、入口を見学するだけで頂上までマイクロバスで行くかと言われる、マイクロバスなら十分登れる山刃伐峠越えの道路が明治になって新しく作られており、その道をバスで越えても山刃伐峠を越えたことになるというわけである。ここは安易な方法を忌避して全員で歩くこととする、オーナーは山頂で待つて下さるのとこのことである。

登り道は整備されている、急な坂道と言えるけれども、深山とか大山とかの登山道というイメージではない、高い山そのものがないのである、峠の一番標高の高いところでも四七〇米あまりなのである。山肌にべったり這い登るようにジグザグの坂道が付けられていて、急なところには材木の形をしたコンクリートブロックが積み重ねられたりで、今風に工夫して歩き易いようになっている。しばらく登ると車の通れる道に出る、箱根街道のミニ版で、山の最短距離を可能なかぎり真直に登っていく道を、近代の新しい道は車が通れる勾配で旧道を寸断しながらクネクネと蛇行して付けられているのである。私どもはその新道を横切りながら整備された旧道を辿るのである、二十数年前、東海道行脚の途次、鈴鹿の下り路・箱根の上り道で街道を見

失なったことを思い出しながら、現代の故郷創生ぶりを実感することである。大汗になりながら、道に迷うこともなく峠の頂上に辿り着くことができた。

頂上は一寸した広場、子持ち杉とか呼ばれる杉の巨木があり、小さな地藏さんが鎮座します、供えものもしてあるけれど旧盆過ぎだからであろうか。『おくのほそ道』の当該本文を刻した石碑も建っている、加藤楸邨筆である。

『おくのほそ道』の道筋の行く先々に芭蕉の句碑（近代のものは多く小宮豊隆とか阿部能成という著名人の揮毫が多い。）のほかに、楸邨氏揮毫の石碑が数多く見られる。楸邨氏の思い入れの深さと地元の人たちの熱意とを反映しているのであろう。一寸ばかり小うるさいという感じもするけれど。頂上周辺は雑木が繁茂していて、眺望は全くない。あまり標高が高いわけでもないのに、美しい景色を楽しむというところでもないのである。

一休みして下り道、市野々に向っての下り道はなだらかな坂で、危険性は全く感じない道である。坂をトントんと小走りに下りていく感じ、「崖道をよじて山頂に出れば尾花沢側への傾斜は比較的ゆるやかでこの山の形が土地の山働き人のかぶる「なだ切」ににているというのである。」「奥の細道―出羽路」パンフ」という峠名の由来も納得できる。ところどころに奥の細道の旧道を示す標識もあって、道に迷うということもない。下り道では荒れているけれど山田

が開かれた跡も見受けるほどの谷間、赤井川沿いの山刃伐
隧道を抜けた新道に出るとマイクロバスが待ち受けてい
る。ペンションのオーナーは、大変早く歩きましたねとお
世辞を言ってくれる、この『おくのほそ道』の旧道は多く
年配の趣味人が歩いてみるのであろうから、若い女子軍の
勢いには勝てないのであろう。これからは安易にバスで尾
花沢に向う、市野々、関谷、高橋、押切、上の宿などいう
集落を通って随行日記にも記す正厳の大集落を抜ける、こ
こらあたりまではのどかな田園風景と称すべきところ、周
辺を小高い山脈に囲まれた広々とした高原の風物が心をな
ごませてくれる。芭蕉主従もこのあたりに到着して今更の
ように山刃伐峠の急坂を想起して「跡に聞てさへ胸とどろ
くのみ也」と感慨したのであつたろう、それほどに中山越
えから山刃伐峠にかけての道とは対照的に平坦でおだやか
な街道なのである。

正厳の集落を抜けてしばらく行けば、最上川の支流丹生
川にかかる西正厳橋を渡る、そして二藤袋と中の段の小集
落を過ぎると尾花沢市街である。マイクロバスは「芭蕉・
清風歴史資料館」横の駐車場に乗り込む、私どもは楽々と
芭蕉たちがたどり着いた場所に到着である。町屋風二階建
の資料館は半官半民の尾花沢市地域文化振興会の委託運営
になるもの、由来はパンフに「資料館の建物は、旧丸屋・
鈴木弥兵衛家の店舗と母家を、清風宅の隣に移転復元した

ものである。向って左半分の土蔵および母家は、江戸時代
末期の創建と考えられ、右半分は明治時代のものである。
店舗の前面には、土間式の「こみせ」があり、土蔵造の「み
せ」には防火扉の葺戸を吊っている。母家は、通り土間を
設け、いわゆる中門造の形をとるなど、雪国の民家ノ町屋
建築の配慮が行われている。母家の四つの座敷は中央の置
き柱のもとで互に接し、柱をとりはずすと三二畳敷の大部
屋となる。この建築は、尾花沢地方における江戸時代町家
の完成した姿を伝える貴重な遺構である。」とある。

山形から尾花沢を経て新庄に抜ける羽州街道、その街道
を北上して尾花沢市街を抜け、突き当りを左すれば新庄に
通ずる街道、右すれば母袋街道（三叉路を左に行くと山刃伐
峠に通じる路となる。）という街道の一区画手前の十字路、
その北の左手の角地に山形銀行の大きな建物があり、その
北側に資料館が建っている。元来は山形銀行のあるところ
に建っていた酒造業の丸屋鈴木弥兵衛家の建物、嶋田屋鈴
木八右衛門家（清風の家）の本家にあたる家と聞いた。堺
田の有路家に比すると、町風に瀟洒でありながら構えは二
階建てだけに豪壮である、左半分が土蔵造りであるから一
層ドッシリした感じを与える。内部は旧態を存したままに
各種の資料が展示されている。清風関係のもの、尾花沢の
俳諧関係のもの、雪国の生活に関するものなどである。

資料館の展示物より清風宅跡が気にかかるので、山形銀

行の西側にある鈴木家の様子をうかがう、写真で見る清風旧宅は茅葺き屋根の二階建てで、鈴木弥兵衛家に匹敵する豪家のようなものであるが、今はその面影もなく普通の現代風の家が建っていて、尾花沢郵便局と向いあっている。奥の細道―清風邸跡―という標柱が建ててあるだけ、山形銀行との間が通り抜けられそうなので、こっそりと入っていくと、小さな祠が建っている。清風家の裏庭ぐらゐにあたらうか、資料館作成のパンフ『芭蕉と清風―おくのほそ道・尾花沢―』の写真と対照するに、清風と高尾太夫の伝説の生まれた人麿像を祀っている人麿大明神である。パンフに「鈴木家では、屋敷の北西隅に小さな祠を建てて人麿像を祀っている。祠は明治十五年の建立。毎年五月十八日にささやかな祭祀を行ない、人麿像の公開を行なっている。」とある、今は鈴木家以外の数軒の人家が建っており、その祠の周辺が少しばかりの空地になっているだけであるが、その祠が屋敷内であったとすれば随分広い屋敷であったわけである。その祠の側を抜けて北側の小路に出たのだが、広い表道から北の小路まで抜けることのできる細長く広い屋敷であったのであろうか。ともあれ街道沿いの角地に鈴木弥兵衛家があり、街道から左手に入った西隣に清風家があったのであり、丸屋と並んで嶋田屋も尾花沢の中心地に偉容を誇っていたのではないか。時は流れて止まらない、昔日の俤を求めても詮ないことであるがウロウロとあたり

を歩いてみる。

ペンションのオーナーがおいしいそば屋で昼食にしましよう、と、資料館の北隣の古い店構えのそば屋に案内して下さる。昼食時で沢山な地元の人が出入りして混雑している、小ぎれいとも申せないけれど評判のそば屋さんなのである。盛り付けもざっくりしているが、タツプリした味でおいしいそばでありました、中華もありまして、これも大変美味らしく、学生諸嬢もお客さんも大変満足そうな顔をしていました。店名は失念で残念です。

九

尾花沢に十日間滞在した芭蕉主従であるが、清風宅に宿泊したのは三日間だけである、山刃伐峠を越えて尾花沢に到着した十七日に「清風へ着、一宿ス。」、それから廿一日に「此ノ夜、清風ニ宿。」、廿三日に「ソノ夜清風ニ宿ス。」という三日間で、その他は十八日に「ソレヨリ養泉寺移り居。」ということになり、養泉寺という寺を常宿としたようである。その天台宗弘誓山養泉寺は清風宅からそう離れているわけではない、歩いて二十分ばかりであろうか、私どもは歩いてではなくマイクロバスで案内される。清風宅の西北方向、尾花沢小学校（元代官所跡のようである。）と指呼の間にある。養泉寺に残っている養泉寺宛戒善院・大円

覚院書状によると、芭蕉訪問の前年、元禄元年十一月頃までに大修理をしており、新築同様の寺院であったようであり、大檀那であったに違いない清風の紹介とて、珍客として丁重なもてなしを受けたであろう。今は明治二十八年の大火で類焼、明治三十年に再建された小さな観音堂が仁王門を入ると拝観されるだけ、ここでも昔日の俤はないようである。別に小高い場所というのではないが、寺の境内からの眺望は低地に広々とした水田が見渡され、新庄への街道が横切っている向うに丹生川が見通される、その向うに「北西に鳥海山、西に葉山、月山」の山影が美しく見えるはずであるが、曇天とて薄ぼんやりとして何も見えない。ただ町中の清風宅に比すると眺望絶佳であったことは間違いない、新築同様であったことと相まって、清風の心遣いが十分に感じられる宿泊場所である。清風の芭蕉に対する接遇の態に丁重ならざるものありとの説もあるようであるが、『おくのほそ道』における清風に対する讃辞は、芭蕉の真意と考えてよく、清風もその讃辞を引き出すだけの接遇をしたとしてよいのではあるまいか。十日間の滞在中あまり直接に接待することはなかったかも知れないが、それは当地有数の商人としての多忙さからは当然のこと、村川素英をはじめ清風周辺の俳人たちが手厚く接遇しているようであるから、手落ちとてなかったであろう。

養泉寺から引き返して、清風の菩提寺たる真宗大谷派花

邑山念通寺を探す、郵便局の横筋の道に入って尋ねていくと、一寸入り組んだ小路の奥に木立ちが茂っており、養泉寺に比すれば大きな構えの寺院に行き当る。元禄十年の清風一建立という伝承ある本堂は、古びてはいるけれど堂々たるものである。庫裏は新らしく立派な建物、浄土真宗だけに生活の臭いがする、お寺の人に清風の墓について尋ねても一向に要領を得ない。大きな石組みの骨堂があり、念通寺檀家の共同墓のようであって、清風個人の墓はないようである。最近の人の墓は沢山並んでいるので、古い墓はいつか合葬したのかも知れないが、本堂寄進の清風の墓が見当たらないというのは何とも合点がいかない。元禄のあの時代に、あれほど活躍した豪商で高名な俳人たる清風でありながら、どうしたことやらと念通寺さんに文句の一つも言いたくなった次第。

次は多忙な清風に代って芭蕉たちの世話をしたかとされる村川素英の墓を見学するというので、羽州街道を南下する。常信寺という寺の近くというので探したが、常信寺そのものは大きな寺で街道の右側にすぐ発見できたけれども、墓はなかなか判らない。上町の観音堂のところにあるというのであるが、街道の左側に、物見櫓の近くに一寸した広場があつて小さなお堂があるのがやっと見付かる、そのお堂の近くにいくつかの石塔があり、それが素英の墓かとためつすがめつするが、その証拠となるものが見当らな

い。街道の側に引き返すと、街道のすぐ側に草に埋れたような有様で路傍の腰掛石然とした四角石があり、その傍の朽ちた木柱に村川素英之墓とある、土に埋もれんばかりに「具一切 功德」の刻字が見られる。素英が生前に建てた逆修墓との伝承があるようであるが、その由来を知らない、素英自身の生き方の問題がそこにはひそんでいるのかと小説的想像をたくましくしたくなるが、さてどんなものか。

今晩は銀山温泉に宿泊であるがまだ時間があるというので、ペンションのオーナーに無理をお願いして最上川まで連れて行っていただくこととなる。尾花沢から直行して四kmで大石田、芭蕉たちは尾花沢から立石寺に赴き、また引き返して大石田に来ているが、その大石田は最上川の河畔に川舟運送の中継基地として船番所も設けられ、近世に発達した町である。尾花沢の町は、大石田に隣接してはいるが、最上川の支流である丹生川（主流流は銀山川であるが、山刃伐峠辺を源流とする赤井川も合流する相当に大きい川である。）と延沢川（隴気川とも呼び川幅のせまい川である。）にはさまれた内陸で、寛永十三年から天領で幕府代官陣屋町として、羽州街道の宿場町として、馬市・六斎市の町として、紅花の集産地として栄えた町で、だからこそ清風のごとき紅花を扱かう豪商も生まれたわけで、ある意味では尾花沢と大石田とは対照的な町と言えよう。芭蕉来訪当時の大石田は山形藩領で、天領だった尾花沢とは町の空気は異なっ

ていたのではないかとも思う、そうではあるが現代の文明の利器たる鉄道は、人口が倍近い尾花沢ではなく大石田を通っている、奥羽本線である。明治の頃は、政治的な力のなかった方に鉄道が付いたという話を聞くけれど、尾花沢と大石田ではどうだったのだろうか、工事の便宜だけで申せば羽州街道沿いに新庄まで線路を敷くのが安上りで良策に思えるのであるが。

大石田のJRの駅前で町内の名所案内板を見て、まず最上川見学というので、大橋の架っているところに向っていただく。最上川沿いのメインストリートと思われる商店街を通って、その中心部あたりで右折するとだらだら坂を上って大橋である、左右に河岸が連なっている。河岸の土手より二・三米低いところに町並みが広がっており、その落差分だけだらだら坂になっているのである。川水は濃い黄色になって豊かに流れている、最近の雨で濁っているのであるうか、岸から岸へ一ぱいに川面が盛り上がるような感じである。川幅は百米はるか超えるのではなからうか、二百米に近いが、岸の近くを見ると水がよどんでいる感じもあるが、川水全体は素早く川下へ北の方に向って流れ去っている。激流とか急流という感じではない、白い川波が立っているのでもない、ただ素早く川下に流れ去っていく湧き立つような波立ちを見るのである。日本三大急流の一つとして著名な最上川なのであるが、大石田周辺の平野部は

平坦なのであろうか、川舟の中継基地としては正に適地であったのである。この流の有様を芭蕉は「集めて早し」と表現しているが、眼前の最上川を見ていると正にぴったりの表現という感じがする。^(注二)芭蕉来訪時は五月雨時であり、私たちが訪れた時も集中豪雨が山形地方を襲った時であったから、まずは条件的に同等と考えてよく、芭蕉が眺めた最上川も私たちが眼前にする最上川も、その様相に共通性が多いとしてよいのではなからうか。

大橋から河岸を少し川下に向うと、「芭蕉遺跡 一栄亭」とする説明板が河岸の陸地側に最上川に向って建てられており、「奥の細道 一栄宅跡」の標柱がある。メインストリートに面した商家や住宅の裏側にあたるところに標柱はあり、最上川に面した建物は見当らない、土手から跳び下りて住居の敷地の境を歩いて大通りに抜けてみる。鰻の寝床というほどのこともないが細長い敷地に、お店やら住居やら離れやらが点在するという有様である。大通りに面したところは商店が多いけれど、旧家らしいただずまいを見せる家もある、高野一栄の子孫はどうなっているのかなど商店の人に聞いてみるが、当方の調査不十分ということもあるけれど、一向に芭蕉のことなどに興を示されない、日々の生活に忙殺されておられるのであろう。ここでは芭蕉が見たであろう最上川の実景を見得たということ、時間もないこととて「五月雨を」の句碑があるという石水山西

光寺に向う、時宗の寺という。

西光寺はさほど大きなお寺ではない、年寄った和尚さんが出てこられて大歓迎、皆さんは中学生かと聞かれて、ガツクリした学生も喜んだ学生もいるけれど、女子大生だと答えると大張り切りで説明して下さる。西光寺の縁起から始まって、芭蕉の句碑の話やら高野一栄の子孫の話やらと多岐にわたる談である。高野一栄の子孫の話が出たので、何処で何をしておられるのかと聞くと、元の場所は売りはらって近くに実在で、何代目かで寺に出入りしていて親しいとの話であるが、何となくとりとめのない感じで話は句碑の建立に飛んでしまう。明和六年頃建立の句碑はガラス張りの覆堂に入っており、副碑（昭和五五年五月五日建立）も屋根付きのお堂に入っている、その建立の経緯を話して下さっているらしいのだが、それも高野一栄の子孫の方との関連が何かあるようではあるのだが、談があらに飛びこちらに飛びでよく判らない。聴き取りをあきらめて、曇天のため薄暗くなっている裏庭で蚊に攻め立てられながら句碑拝見、金色堂並みの保護手法がとられている石碑であるが、句碑は露天のもと苔むしているのこそ本場の風情があると思うことである。和尚さんの長広舌に少々辟易して、聞きたいことは沢山あるのにといいながら、薄暮とともに退散である。

ペンションのオーナーの御親切で予定外の大石田にも寄

り道したのであるが、夕暮れも迫っているので今夜の宿泊場所である銀山温泉の銀山荘（尾花沢市大字銀山八五番地、Tel〇二三七・二八・二三二二）に向う。銀山温泉は尾花沢市の郊外の温泉街で、マイクロバスで三十分以上西の方の山の中に入ったところである。地図で見ると、南の方に高倉山（標高六九三・六米）、西の方に半森山（標高七〇九・五米）、北の方に二ツ森（標高七四二・四米）などという山々に囲まれ、銀山川の溪谷を堰き止めた銀山川ダムの岸辺に位置する温泉湯である。曇天でダムの湖面が煙っているぐらいで、周辺の山々は霧のかなたにとけて見えないが、近くに国指定史跡となっている延沢銀山遺跡があり、銀坑跡の間歩や疎水が残存しているという。延沢銀山は、慶長年間の開発で「一時は佐渡や石見・生野の産銀に匹敵した。」（パンフ）という、尾花沢が天領であったのは、延沢銀山の支配を含みとしたものようである。銀の産出は寛文ごろまでで、芭蕉来訪当時は過去の事柄となっていたのであろう、当然のことながら芭蕉主従の記録には、かくのごとき産業に関する俗事に触れるもののあるはずもなかった。

今は温泉の湯につかって、明日の山寺参詣のために鋭気を養うこと専一である。

十

山寺即ち宝珠山立石寺への参拝は、芭蕉主従の旅程から申せば予定外のもので、「人々のすゝむるに依て、尾花澤よりとつて返し、其間七里ばかり也。」ということのようであった。随行日記によれば、清風に馬を提携されて館岡まで、それから六田・天童と羽州街道を南下、この街道は山刃伐峠などの道に比すればまことに平坦で一直線の道で、行脚の苦労はなかったはずである。天童より山寺までは日記に「天童一里半三近シ山寺未ノ下越ニ着是山形へ三リ」とあるように、一里半ばかりの道を歩いている。地図で見ると、この山寺街道も原町、片羽、萩野戸、地藏堂、芦沢などいう集落を抜ける一本道で、山の中の道というものではなさそうである。

私どもの小旅行も五日目、八月の最後の日である三一日（水曜日）の朝、昨夜来の雨もあがって曇天ながら明るい、タクシーを呼んでJRの大石田駅に出る。特急列車の停車することもある奥羽本線の主要駅の一つである大石田駅だが、駅舎も駅前の町並みも赤字の過疎地の地方線の主要駅並みと申しましようか、乗降客もあまり見かけない。大石田駅を九時五八分発の快速列車で出発、山形着は十時四三分である。『おくのほそ道』に「山形領に立石寺と云山寺

あり。”と記す山形領の城下町たる山形へは、“山形へ三リ”という近くに来ていることを自覚している芭蕉主従であつたけれど、足を伸ばしていない。元和八年に改易されるまで最上氏六一万石の大々名の城下町、芭蕉来訪時は格落ちの譜代大名の城下町であつたようであるが、芭蕉にとって城下町などというのは訪問する対象となり得なかつたのである。語るべき俳友もなかつたのもあるう、私どもは列車の都合で山形駅へ一応降りたのであるが、市内見学などする余裕はなく十一時五分発の仙山線の列車に乗る。仙台と山形を結ぶ地方線であるが乗降客は相当見受ける、楯山という駅あたりから山沿いに列車が走るようになる。次の高瀬という駅からは全く山の中を走るけれども、深山幽谷の地に登っていくという感じではない。平坦な山地を走り抜けて右手の川沿いに開けた集落を見ながら山寺駅に着く、十一時三分、単線なのでこの山寺駅で仙台行と山形行の列車がすれ違うことになっているようである。観光地として主要駅の一つなのであろうが旧い駅舎、降り立つと最上川の支流である立谷川の川向うにそそり立つ岩山の間に多くの院々が点在する山寺の全容が見渡される。数多い立石寺礼賛の文章によって期待させられていたよりは小じんまりとした印象であるが、巨大岩石の黒褐色と院々の屋根の輝きが圧倒的な木々の緑の中に埋められた展望はさすがである。

今夜の宿であるホテル芭蕉（山形市山寺・Tel〇二三六（九五）二三〇五）の御主人がマイクロバスで出迎えて下さる、宿に荷物を置いて軽い昼食を摂り、いよいよ立石寺参詣である、千数百段と言う石段は登れないかも知れないと宣言して出発する。ホテルと申すには一寸古色蒼然とした宿の御主人が、最初に根本中堂に参拝して内陣拝観後に山寺に登りなさいと忠告して下さい、立谷川に架る宝珠橋を渡って左手に対面石という大きな二つの岩石を見ながら左の方に進むと登山口がある。はるか前方には鉄橋が架っており、仙台方面に向う線路である、登山口を少し登ると重文の根本中堂がある、宝珠山阿所川院立石寺の信仰の中心である。桁行五間、梁間五間、一重入母屋造、銅板葺という御堂で、山形の初代城主斯波氏が正平十一年に建立し、慶長年間に大修理をし、昭和三八年に解体修理を行い建立当時の様式に復原されたという。堂内は内外陣に分かれており、外陣も薄暗いけれど内陣は燈明で明りをとるぐらいで闇の中、壮年のお坊さんが丁寧な説明をして下さる。特に印象に残ったのは、内陣にある不滅の法燈のこと、延暦寺から伝えられた法燈なのであるが、延暦寺が織田信長によって徹底的に破却された後で再建された時、この立石寺の燈火が再び延暦寺に分火されたというのである。延暦寺に伝来された三国伝来の法燈が、立石寺を媒体として今に伝えられ得たという伝承は、人々にある種の感動を惹起せしめる話柄

である。立石寺のお坊さんたちは、今も日夜この法燈の火を絶やさないように奉仕しているのであり、それがこの寺院の信仰を強く支えているのであるようであった。

根本中堂見学を終って外陣前に立って周辺の木々の緑に見入っていると、大学生らしい男女の集団が数十名歓声を挙げて山門に向かって走っていく、根本中堂など見向きもしない。東京の大学の研修旅行であつたらしいが、いかに『おくのほそ道』の「岩にしみいる」状況見分としても、根本中堂無視は嘆かわしい次第、お坊さんの説明や内陣の桃山期らしい華麗にして壮重な装飾に感銘を受けていただけに、その感が強い。その大学生たちの後を追って山門に向う、途次に右手に芭蕉句碑、日枝神社、秘宝館などあり、左手に露店や芭蕉像などが並んでいる。秘宝館の仏具・佛像拝観して、招福の鐘として著名な鐘楼を右に見て、「開北靈窟」との扁額のかかる山門を抜けて石組みの段を登り始める。巨大な岩石が累累と積み重なっている間に各種の老樹が空をおおって茂っている隙間を縫うように造られている石段で、広がったり狭まったりしながら左右にくねくねとのたうって登っていく、急坂ではあるが途中に休憩場所も多く目を楽しませるものも多くて、左程疲れを覚えないうで登られる。

嘉永年間に当山六五世情田和尚が再建したという仁王門の手前、不規則な石段の左側の一寸した平地に蟬塚がある。

正面に「芭蕉翁」とあり右側面に「閑さや」の句が刻してある蟬塚は、林崎の俳人坂部壺中（一七〇八〜一七六九）が翁の書いた短冊を土台石の下に埋めて建立したものである。正に清閑の地に鎮まります塚と申すべきでありましょう。今に名吟として称賛される「閑さや」の句を得た芭蕉も、その数多い句碑の中でも出色の出来と称すべき蟬塚を得て、心休まるものがあるのではないか、千数百段の石段を奥の院まで登るのが無理であればせめて蟬塚までと思っていたのだけれど、蟬塚まで登っても一向に息切れの様子がないので、更に山上を目指して登ることとする、若い人たちは言うまでもなく元氣瀉刺である。

仁王門をくぐり抜けてからはひたすら奥の院を目指す、途中の岩石には無数の観音像やら岩塔婆などが刻み込んであつて、中には苔むして由緒深さをうかがわせるものもあり、この寺院と山に対する信仰の深さを感じ得る。途次の金乗院から右手を見ると、絶壁の空中に木で組んだ梯子が架っており、それを登れば胎内くぐり、胎内堂とあつて釈迦堂に至るらしいが、最近事故があつたとかで危険の標識があり、右手の岩上にある釈迦堂を見上げながら眼下はさぞ絶景であろうと想像だけで回避、とにかく奥の院を目指す。途中に中性院という小さな寺院があつて、一種の休憩所になっている。坊守のお婆さんと話しをしたり、絵葉書などといった一寸した土産ものを買ったりで、石段登りの

疲れが中和される。カバンを背負った小学生らしいのが馳け上ってきたりしていたから、この院にも普通の生活があるであろう。

奥の院は如法堂と言う、四間四方の本堂と小さな庫裡があり、周辺には燈籠やら石塔やらが数多い、本堂には数多くの絵馬や厨子が奉納されており、それが多くは真新らしく生々しい。奥の院と言えば、山奥深く鎮座ましまし、幽邃の境という感じと想っていたのだが、山頂近くで木々の緑におおわれた山奥ではあるけれど、山寺の特長である岩石も少く、丁度大きな石塔を据え付ける工事中であつたりで、何となく俗世の雰囲気濃厚なところである。それだけに信仰が土着性を有しているのかも知れないと思うことである。

石段を登るときはゆっくり休憩しながらで、早々に山頂に駆け上った先発の大学生諸君に中腹で出会うという有様、奥の院では少々息もあがっていたが、下りとなると楽なもので元氣一杯、華藏院の入口の岩屋内で重文の三重小塔を見学、釈迦堂の逆方向にある右手の道に入って東宮記念殿（大正天皇が皇太子時代に行啓、御休息所として建てたもの、風景展望絶美）から開山堂（慈覚大師廟）納経堂（百丈岩の頂上に建立の一間四方の小堂）などを見ながら岩間を抜けて五大堂に登る。恐る恐る眼下を見おろす、そこに展開する山寺周辺の全景は、平凡な表現ながら箱庭を見るように美し

い。立谷川と仙山線の線路と山寺街道とが三つの直線を描いてアクセントとなり、点在する民家と山々の濃密な線とが調和して人工と自然のハーモニーが美しい。ふっと思う、芭蕉の名吟「閑さや」の句は、立石寺の石段を登るときに着想したのであろうか、それとも石段を降りるときに思いついたのであろうかと。そんなことに言及した人は、もちろん知らないし、馬鹿げた発想かも知れないが、石段を降り降りしていると考えてみたくなる命題である。

石段を登るときは、左右の小道に入り込んで周辺の風物を楽しもうという気持は起きなかった、ところどころで休憩しながら、とにかく奥の院まで辿り着くのが第一だと考えた。目前の一木一草に目を向け石塔婆の苔むした字面を見て、それを唯一の楽しみにしながら石段を踏みしめて登った、さすが何か所かで息切れもしたのである。夏の終りで涼しい風も吹いていたけれど、汗は吹き出して止まらない、梅雨明けで初夏も過ぎた頃に訪ずれた芭蕉は（陽暦七月十三日のこと）、尚のこと汗みどろになって登ったのではないだろうか。

石段を降りるときは快適である、足の悪い私でも軽やかに跳ぶがごとくに降りられる。風も心地よく吹き去る、汗もほとんどかくことがなく、あちこちの名所に寄って風景を楽しもうという余裕ができてくる。ただ足元が気になつて、用心深く石段を踏みしめる、そして注意は散漫になる

ようである。体感として石段を登るときと降りるときとは両極の情感があるように思う、あの「岩にしみ入」（初案は俳諧書留の「山寺や石にしみつく」で、再案は『初蟬』元禄九年刊所載の「さびしさや岩にしみ込」とあって、『おくのほそ道』の句形となる、「しみつく」という初案が案外芭蕉の体感をもっともよく示しているのかも知れない。）という表現は、登りと降りの人間感情が両極に分かれているとすれば、そのどちらかの途次に着想したとしなくてはならないだろう。「石にしみつく」にしても「岩にしみ込」にしても「しみ入」にしても、感情の集中あって始めて生まれる表現であるように思われる、そうだとすればある一点に思念を集中しなくてはならない時、それは体力の限界ということもあって、石段を登るという行為の時ではなかったか。そう考えることによって、「石にしみつく」という表現が生彩をもって迫ってくるように思える。もっとも評者たちは山寺ということ、登るといふことのみを考えてこの句に対しておられるのかも知れないのであるが。

ところで芭蕉は、俳諧という詩的表現の場において、常に自己体験を相対化して詠出する人であったように思う、相対化する契機は歌枕であったり、歴史的遺物であったり、古き伝承であったり、時には自然そのものであったりする、様々である。「閑さや」の句では、初案における「山寺」という現場があつて、そこに自己体験としての「蟬の声」

があり、自己集中の極として「石にしみつく」という表現が生まれたのである。この初案の句を後日に検討したとき、芭蕉にとってそれはあまりに生な自己体験の直接詠法と思われたのではないか。石段を登るとき眼前あつた「石」は、山寺の全景を想起するとき、「もちろん「石にしみつく」はどう考えても立石寺ではスケールが小さい。石は雑景に終わって、全山岩を以て成るこの山にそぐわない。」（芭蕉の山河―おくのほそ道私記―加藤楸邨著）とあって、まずそれを相対的に客観化して「岩」とする、「しみつく」というのは極めて直截な表現であるけれども、いくらか俗臭を感じさせるし、「つく」という語感石の表面に蟬の聲が張り付くという印象を与えるので「しみ込」とする、そして自己体験を突き放して客観的に相対化したとき、「山寺」という具体的な場を「さびしさや」という普遍性のある情景描出の感情表現に転換するをよしとしたのではなかったか。

再案によって客観的に相対化するという作業はある程度成功したと思うけれども、芭蕉は更に「さびしさや」を「閑さや」とし、「しみ込」を「しみ入」とする、それは何を考へてのことであつたらうか。まず「さびしさや」という語句の「閑さや」への転換であるが、芭蕉は「さびしさ」という語に人間の感情という夾雑物を感じとり、「閑さ」という自然の状況を純粹に表現する語に転換したのではな

かろうか。「しみ込」を「しみ入」としたのは、「岩にし
み込」は大きく飛躍したが、「しみ込」では、外から水の
類のしみこんでゆく液体の感覚からどうしても脱け出すこ
とができない。――略――そして「しみ入」に達してはじめて、
「声」という無形の力が岩にしんしんとしみ徹る感触を持
つことになる。（『芭蕉の山河――おくのほそ道私記』加藤楸邨
著）というところが正當な評と言ふことができよう。かく
して最終案が完成する、その最終案を『おくのほそ道』の
「立石寺」の地の文章である「殊清閑の地也。」「岩に巖を
重て山とし、」^{かさね}「岩上の院」^{とひら}「扉を閉て物の音きこえず。」^い「佳
景寂莫として心すみ行のみおぼゆ。」という表現の連なり
の後に置くとき、この句はぴたりと決まると言えよう。地
の文章は、芭蕉たちの息使いや汗の臭いは捨象されており、
山寺全体の情景をいくらか美文調ではあるが程よく把握し
て相対的に客観描写したものである。だからこそこの地の
文章の後にあって、この最終案の句は落着くのである、そ
れも改案を通してこの句の客観的相対化が実現されたから
であらう。

とは言っても、山寺という場で「蝉の声」がしていると
いう情況と、山寺の岩石にその声が「しみ」ながらあると
いう芭蕉の直観的感性には変化はない。それはやはり極度
の集中力あってひらめく感性なのであり、奥の院を目指し
てひたすら登り続ける姿勢の中から始めて湧出する感性な

のではなからうか。

こんなことを考えながら五大堂から下りてだらだら坂を
いくと、薄暗く繁茂した樹林の中の広場に出る、近くにお
籠り堂のごときも見られるところ、恐る恐る絶壁の上に出
ると山寺第一の名岩と称される天狗岩である。五大堂まで
は相当な観光客が見られたが、このあたりになると人影も
少い、深閑とした空気の中で眺望は雄大であり絶佳であ
る、晴れた空と涼しい風は私たちに幸せを運んでくれたと
言える。再び石塔婆の岩石の間の石段を降りていく、また
たく間に山門を抜けて下山である。山門前の露店めいた土
産物屋で土産物の物色、たちまちに俗塵に混じってしまう
ところは俗中の俗人たるゆえんである。「当山を参詣した
人のすべての苦しみや悩みが抜ける」（山寺の案内書）とい
う抜苦門を抜けてかや葺屋根の立石寺本坊の前を通って下
山口に降りる、本坊前は整理されたお庭になっているが犬
が飼われていて俗臭をただよわしている。

門前町の店は、早々に店仕舞をしているところもある、
ウィークデーのことで観光客も少いのであらう、疲れたこ
ともありホテルに引き返して休憩である。

十一

ホテル芭蕉の夜色は、この研修旅行の最後の宴である、

カラオケもあって盛り上ったところで反省会、そこで思いかけず学生諸君の感激の涙を見た、今までの多くの研修旅行でも見なかった盛り上りであった。考えてみると、今の学生諸君にとっては、高校までの団体旅行は全てお仕着せの旅で、初めから終りまで自主的に計画し自主的に行動しながらの団体旅行の経験は始めてのことなのである。それが一糸乱れず、と言えば語弊がある、名目的統率者たる私が予定外の行動をとって協道に入り込んだり、同じ所に立ち止まって何時までも動かなかったり、皆がショッピングしたいところではさっさと通り過ぎたりで、少くも一人は統率を乱し勝ちであったが、とにかく事故もなく予定通りに旅を終えることができて、しかも大きな友情がその中に生まれたことを体感して、そこに新しい感動が生まれたのであろう。その感激の余韻は、深いねむりと呼んでくれる、ホテル芭蕉の薬湯―紅花などが大量に入れてあった―が、疲れた身体をほぐしてくれたのかも知れないけれど。

九月一日（木曜日）、早い朝食をすませて八時十八分の列車で出発、仙台方面に行く諸君と山形方面に向う数名とに別れる、山寺駅で解散なのである。

平泉から立石寺までの研修旅行同行者は次のごとくである。馬山展子（院生）青戸貴子・烏田ゆかり・木下美佐子・久保田知佐子・佐々木玲子・谷口真紀・綱脇暁子・中原あや・西村美保・橋口純子・日高啓子・堀土輝美・松坂有

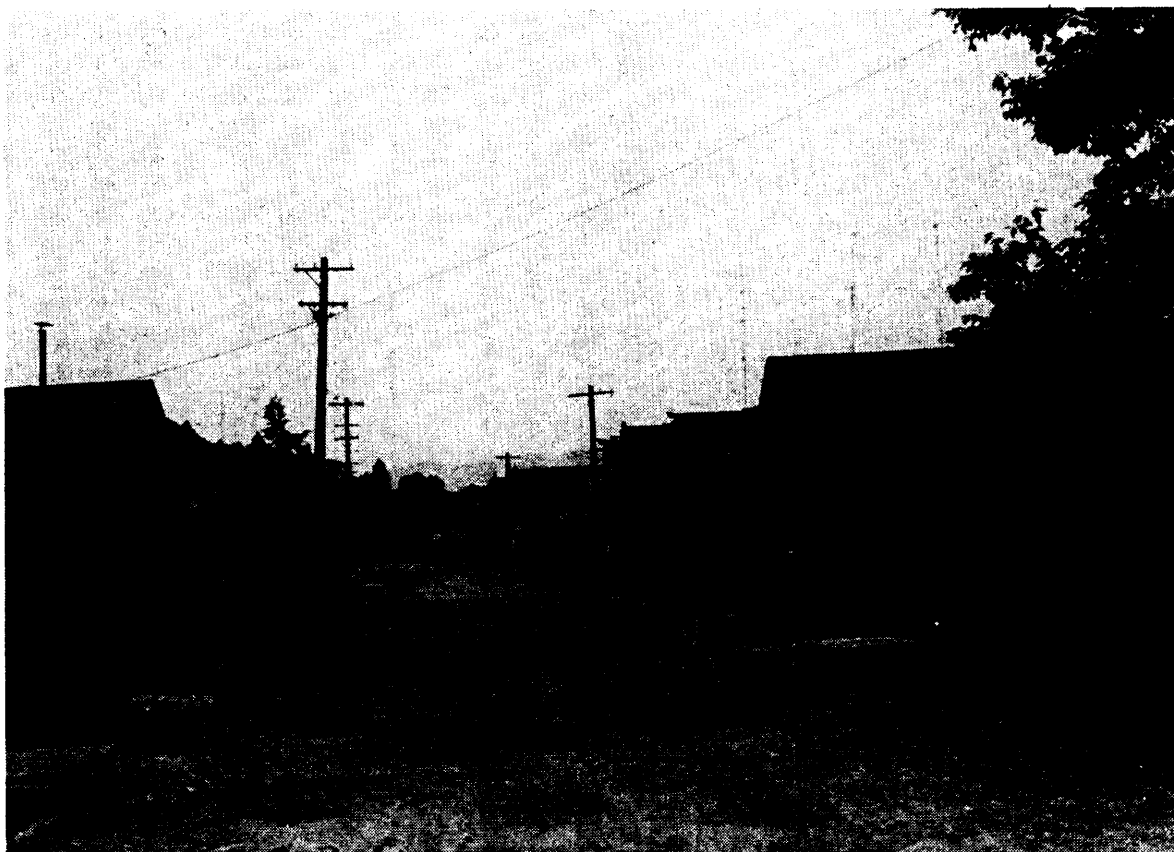
里子・森岡恵美・矢野綾子・了戒佳世。

付記

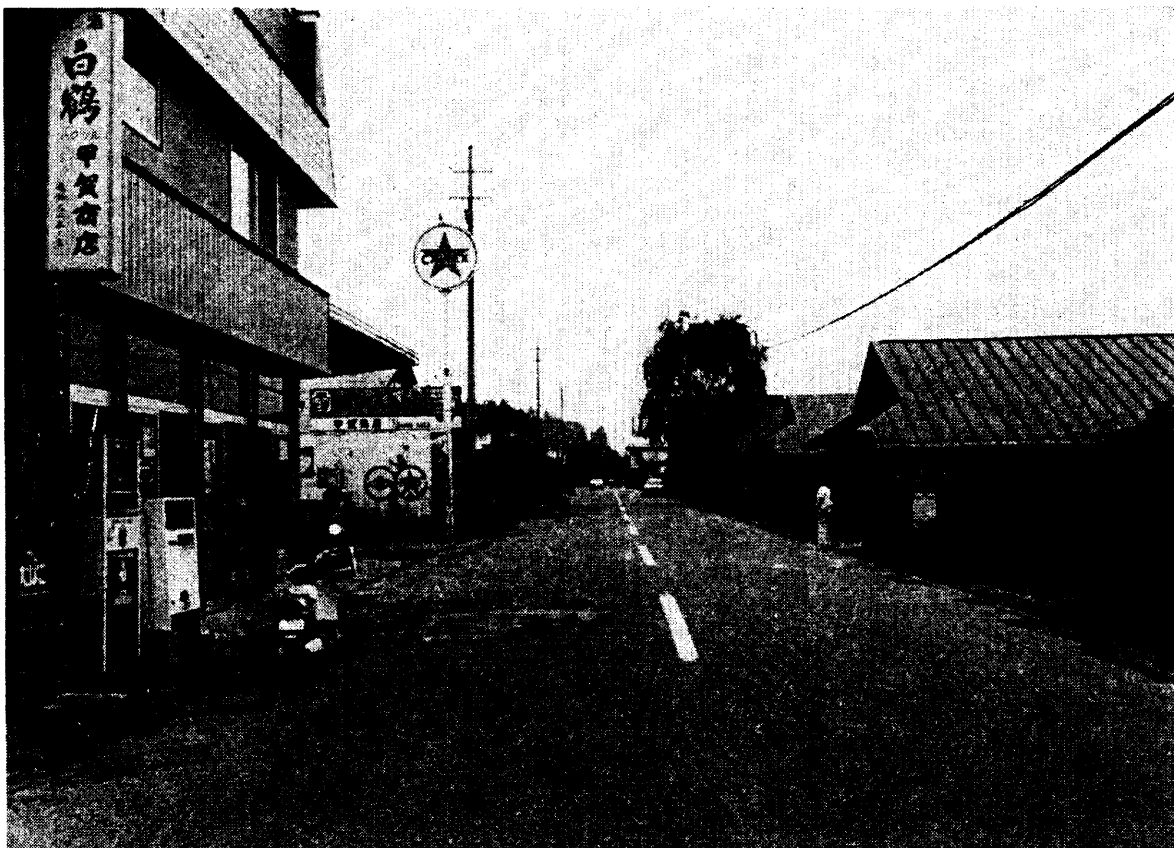
この研修旅行の帰途で須賀川と白河に立ち寄ったことの報告は、前号の「文教国文学」に寄稿した。その後、湯之上早苗教授から二枚の写真を提供された、大変面白く参考になるので、ここに掲載させていただく。（A）はモノクロで昭和三十八年八月十日撮影、（B）はカラーで昭和五十六年八月二五日撮影である。場所は白河関前の街道、旗宿に至る途次で、向うに見える森が白河関跡である。

湯之上さんの若い頃、昭和三十八年と言うのは二五年前ですから三四・五才で若いと申すべきでありましょう、時に当てもなく飄然と旅に出る癖があったようで、昭和三十八年の夏休みにもボーナスを全部持って東北放浪の旅に出られたようである。そして自分の歩いたところを無意識に振り返ってカメラに収めるといふ癖もあったようで、昭和三十八年の写真は放浪の旅の途次のもの。昭和五十六年の写真は、学生を引率して『おくのほそ道』の研修旅行に行かれたときのもの、この時も無意識に振り返ってカメラに収められたようである。後日、両者を比べたら、全く同じ画面であることに気付かれて、ここに御提供いただいたのである。二十年あまりの歳月は、多くの変化を与えている、道幅は同じでも舗装されて溝に蓋がしてある、電柱がコンクリ製に変っている、雑貨屋さんなどの家が近代化している、柳の木が大きく育っているなどである。この二十年あまりの日本の国土の変貌は未曾有のもの、この程度のことは当り前かも知れないが、今更のように驚く。

(A)



(B)



三百年という歳月における変化はどんなものであったのであろうか、この写真を眺めながら、今更のように歳月の流れの大きさを実感するのである。そして湯之上さんは華甲の齡を重ねて「癖」もマルク変げられた。

注一 「文教国文学」第三号、昭和六三年三月三日

「文教国文学」第二三号、平成元年三月一日

注二 「五月雨を」の句の初案は、一米に対する挨拶として「集めて涼し」とあったというのは著名な事実、諸説は最上川下りを実体験することによって「早し」という実感のある語を選んだというのであるが、「早し」という語は荒々しい激しさを示すところはなく、船下りを体験してみないとよく判らないとも言えるが、目前に見る最上川の流れこそ「早し」と表現するに適わしいと思うことである。